

## 第11回ミニ講演会 報告

日 時：2018年3月3日(土)10時～11時30分

場 所：杉田地区センター

参加者：講演会28名(1958～1970卒)、懇親会(ランチ)22名

講 師：石川 幹夫氏(1972・法学部卒)

テーマ：「能に魅せられ、謡を楽しみ三十年」

内 容：

司会は大学時代に謡曲部に在籍していた(私)水野裕子でした。一昨年総会で講師と共に謡を披露して、その謡の素晴らしさと理論的に能に関わる取り組みが興味深いので本日の講演がとても楽しみである事をご紹介いたしました。能をたくさん見ているという支部長の挨拶も「わくわくしている」でした。



着物姿で講演に臨まれた講師は、まずご祝儀の「四海波」を謡いあげられ、一般的に祝いの謡が「高砂」と思われているが(結婚式でよくめでたい曲として謡われます)、実はこちらが新しい出来事を祝う謡いであるとのこと。会場中を響きわたるその声で一瞬にして異空間へと導かれました。

(1) 能とは。。

能の変遷という話から始まりました。能は当初庶民にも身近なものであって、寺が勧進の為に野外でおこなわれていた猿楽がその始まり。1374年と伝えられる足利義満と世阿弥との出逢いは、その後の能の発展に大きく寄与することになります。世阿弥の美しさに魅入られてというお話に興味を湧くところでした。

その後、権力者となった信長、秀吉、家康は能に傾倒することになった。それは古来よりあった日本人の心に染みついている怨霊信仰に基づく鎮魂の念が底流に起因するとの解釈できるのではとの弁(講師解釈)。

戦乱が終わり、江戸時代には将軍、大名の式楽として認められ、武士のたしなみとして定着しました。庶民にも愛された初期のものは、江戸時代よりもかなりスピード感のあるものだったそうです。

能の演能のやり方は江戸時代から一日五番演じられるのが正式ともいわれ、演能順は曲柄(曲趣)から「神男女狂鬼」でした。今日では五番することはないですが、順番はこれに従います。

次に、配布された能舞台の略図を元に独特の能舞台の成り立ちや所有されている面「深井」をお持ちくださり、皆さんにご披露いただきました。

世阿弥によって作られた特別な話の展開は複式



夢幻能として、時空を越えて無限に物語を紡ぎ出せる方法であると話されていました。

能は舞台装置や小道具がシンプルにされている分、観る方は想像力を必要とするところもあるので、ぜひ、あらすじや解説書など読んでいただき知識、情報を得て実際の能を観て、その面白さを感じて欲しいとの事でした。

皆さん、体験も楽しみにしていたので講義はここで終わり、一番お話しになりたかった世阿弥の一子相伝の『風姿花伝』（花伝書）については懇親会に持ち越しとなりました。

## （２）高砂の謡いの体験

いよいよ参加者全員で謡うことになりました。謡い本（能の台本）をご覧になるのが初めての方もいらっしゃるので、講師考案のオリジナルの音譜にて講師の後について謡い、難しい節のところは解説いただき、西洋音階にのみ親しんだ方にとって新鮮な体験となったようです。「たかさごや～このふらぶねに～」なんと！「かなり謡いらしく謡うことができました。」と講師からのお褒めの言葉をいただきました。

その後、講師が作曲された新しい祝小謡の「円居（まとい）」をご披露いただき、質問時間もなくなるほどの内容の濃い講演が終わりました。



懇親会（ランチ）：12:00～14:00 パレドバルブ（徒歩5分）司会は副支部長の井村正和さん（1977・法）。最年長の西岡睦夫さん（1958・経）による「ひなまつり乾杯」の後、楽しい食事会が始まりました。

恒例の自己紹介は毎回とても楽しく興味深いもので全員のお話をご披露したいほどです。講義内容についての質問もあり、最後に石川講師が質問に答え、「花伝書」の補講として、「初心忘るからず」は、始めた時の気持ちだけではないこと。年月を重ねるとともに直面する試練を乗り越えるときの境地、想い（その典型は絶頂



ひなまつり乾杯（西岡さん）

期と老いによる衰退期)を忘れずに一生涯能に励むように、これこそ世阿弥が伝えたかった事だとお話くださいました。

最後は、全員写真を撮り、山田副支部長のイントロに続き皆さんで校歌を歌って御開きとなりました。

【副支部長 水野裕子・記】



一言スピーチ



校歌斉唱

